

日本労働年鑑 第54集 1984年版
The Labour Year Book of Japan 1984

第二部 労働運動

XIII 政党

4 日本社会党

1 概況

書記長人事をめぐる混乱

八二年二月の第四六回党大会では、それまでほとんど無名の馬場昇代議員(新生研)が飛鳥田一雄委員長の強い意向をうけて書記長に選出された。しかし、馬場氏の起用には右派の政権構想研究会や社会主義研究会が強く反対し、両派は事実上執行部入りを拒否。党内抗争の火種を残すことになった。

対立の焦点となったのは、党機構の改革問題であった。第四六回大会決定にもとづき、機構改革検討委員会(委員長・石橋政嗣副委員長)が設置されたが、一二月党大会で改革案が承認された場合、いつ実施するかが問題だった。反主流派が、ただちに実施し、同時に人事を一新すべきであると主張したのにたいして、主流派は、任期途中の交替は筋違いであるとして、これに反対。次の定期人事大会まで改革案の実施をのばすか、即時実施する場合でも、機構改革にともなう補充人事にとどめるべきだと主張した。

一方、公職選挙法改正問題でも自民党のペースにのったとして、国会対策をめぐる執行部批判が噴出した。なかでも、馬場書記長選任に批判的であった総評は、再三、反主流派をふくめた挙党態勢実現をせまり、主流派内でも「人事手直しはやむを得まい」という見方が出はじめた。

石橋副委員長辞意表明

事態を急変させたのは、八二年一月二日、石橋副委員長が健康上の問題を理由に辞意を表明したことであった。このころ、党内には一二月党大会に向けて「飛鳥田・馬場おろし」の動きがあり、石橋辞任はこれに巻き込まれまいとしたものであると見られた。だが、石橋副委員長の辞意表明は、飛鳥田体制の弱体化をまねき、「馬場おろし」にはずみをつける結果となった。同月一八日、各派懇談会をふまえた三役会議は、人事問題を石橋氏に一任、二六日には田辺誠、小柳勇、田中寿美子の三副委員長も辞意を表明した。

これにたいして、馬場擁護派の新生研、旧三月会は、(1)馬場書記長が解任されるなら、中執から両派メンバーを引き揚げる、(2)その場合、飛鳥田委員長にも辞職を求めるという強硬姿勢を打ち出した。一方主流派のなかでも、勝間田派は早くから馬場氏交替に柔軟姿勢をみせ、協会派は党の危機回避という意識から、側面で馬場氏交替へ主導権をとったといわれる。このため新生研究会なども、中執引き揚げを実行すれば、党内で孤立するという判断に傾き、結局、馬場書記長は任期なかばで辞任に追いこまれた。

平林書記長急死

八三年二月九日、一二月の第四七回党大会で書記長に選出されたばかりの平林剛氏が急死した。統一地方選と国政選挙を目前に控え、過密スケジュールに追われたうえ、都知事選候補者選びが難航していたことも重荷となり、持病の心臓病が再発したためであった。後任には、田辺誠氏(政構研)が、副委員長兼職のまま書記長代行に選ばれた。

もともと、田辺氏は、第四七回党大会で書記長として政構研が強く推したにもかかわらず、主流派がうけいれず、結局社研の平林氏に落ち着いたいきさつがある。とくに新生研などは、「馬場おろし」の張本人として田辺書記長の実現に強く反対した。しかし今回は政治決戦を前にしての非常事態であることから、ほとんど抵抗なしにその起用が決定された。

このように、就任後わずか一〇ヵ月で馬場書記長が辞任に追いこまれ、さらにその二ヵ月後には後任の平林書記長を失うという、社会党にとって異常な事態の連続であった。

止まらぬ長期低落傾向

八二年八月一九日、社会党は「八三年政治決戦選挙闘争本部」を発足させた。同月三十一日、鳥取・兵庫を皮切りに全国遊説を開始、九月二日、衆院第一次、参院第三次の候補者リストを発表したが、選挙準備は他の野党とくらべても立ち遅れがめだった。新執行部体制ができて一ヵ月たつても、「まったく進んでいないのが実情」(『毎日』一月一七日付)だった。世論調査の支持率も、八一年六月から、一六～一八%を低迷していた(『朝日』九月一〇日、一二月五日、八二年二月一九日、五月一四日付)。いきおい国政選挙の目標も「与野党伯仲状況に戻る」(飛鳥田委員長、『朝日』四月二七日付)というひかえめなものであった。

八三年四月の統一地方選では、北海道・福岡の知事選で勝利したものの、県議三九九人(改選前にくらべ七人減、他に推薦二三人)十大市議一一八人(一〇人増)、二三区議一〇六人(四人増)、市町村議一二二六人(四一人減、他に推薦七八人)と、ふるわなかった。その一因は国鉄の議員兼職禁止措置なども影響し、立候補者数が減少したことにあつた(『社会新報』四月一五日、五月一日付)。

六月参院選においては、比例代表区(旧全国区)では、中村哲法政大総長ら九人を当選させ、改選議席を維持した。しかし、選挙区(旧地方区)では四議席を減らし、一三議席にとどまった。得票率は前回より伸ばした(比例代表区三・二%、選挙区一・九%)ものの大都市での後退がいちじるしく、太平洋ベルト地帯では完敗であった。

飛鳥田委員長退任

八三年六月三〇日、事実上、参院選敗北の責任をとるかたちで飛鳥田委員長は委員長退任の決意を表明した。飛鳥田氏が党再生の期待をにない横浜市長の任期途中で委員長に就任したのは七七年暮のことであった。飛鳥田氏は就任の際、委員長の権限強化を主張し、また新たに採用した委員長公選制で投票総数の九八%、全黨員比でも八割という高い支持を得ただけに、党の内外から、強力な指導性の発揮が期待されていた。たしかに、五年余の在任中に、委員長の公選制導入、「百万党建設構想」、いくつかのシンポジウムや平民会議など知識人・文化人の社会党への協力の強化をはかるなど、飛鳥田色の濃い企画やアイデアは提起された。また国際活動でも、社会主義国との交流と同時に、現職の委員長として初のアメリカ訪問をおこない、また社会主義インターを中心に資本主義国の社会民主主義政党との交流をはかるなど、新しい企てはなされた。しかし在任中、最

大の政治的決断であった、全野党共闘路線から社公中軸路線への転換とその後の野党共闘の進め方をめぐり、委員長の指導性の弱さが党内外から指摘されつづけるという結果に終わった。なお八三年八月現在、飛鳥田氏の後任には、石橋正嗣副委員長の就任が確定し、また書記長には田辺書記長代行が選ばれる見通しである。

仙台市長選パーティ事件

仙台市は社会党が与党の数少ない都市の一つであるが、そこで社会党のイメージを低下させる事件が起きた。八二年一月におこなわれた社会党宮城県本部主催の仙台市長選パーティの収入を約五〇〇〇万円少なく報告していただけでなく、このパーティ券を地下鉄受注予定業者に大量に売りさばいていたことが明るみに出たのである。このため、八月二三日、宮城県本部の三役と財務委員長、選対委員長が辞任した。

松本代議士自殺

一月二八日、社会党の松本幸男代議士(五六歳)が、「選挙への心の重荷」などから自殺した。また五月一日には、田口一男代議士(五七歳)、八二年八月三〇日には元党副委員長赤松勇氏(七十二歳)、一二月二五日には戸叶武参院議員(七九歳)が死去した。

日本労働年鑑 第54集 1984年版

発行 1983年11月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 ●

2001年8月28日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1984年版(第54集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
